

自然科学部門

『性の進化史』（新潮社・1404円）

毎日出版文化賞の人々

②

染色体を突き詰める

松田洋一さん



まつだ・よういち 三重県生まれ。名古屋大学大学院生命農学研究科教授。同大学大学院農学研究科修了（農学博士）。放射線医学総合研究所主任研究官などを経て現職。63歳。＝山下浩一撮影

「染色体研究に携わった先人や仲間、またその面白さを世に伝えたいと思ってる方々の代表としていただいた賞だと思えます」。受賞の喜びをそう語る。

生物に関心を持つきっかけは小学生のころ、姉が子ども用の小さな顕微鏡を買ってくれたことだ。「池の水を集め、それでプラシムンを見るのに熱中してました」。早熟の少年は高校生のころから遺伝の研究者になりたかった。さらに決定的だったのは名古屋大学大学院に進学して間もないころ。動物の細胞をシャーレで培養し、染色体標本を作った。「その時顕微鏡

で染色体の形を見て、とても美しいと思いました」。今に至る長く長い道が開いた瞬間だ。「染色体の数や形はどんなことを意味しているのだろうか」。その問いを突き詰めてきた。

専門書ではなく、一般の読者に向けたものを書くのは初めて。「染色体とは何かを、できるだけ分かりやすく書きました。本当に難しくなかった」と振り返る。

長年の研究成果を広く世に伝える本書の冒頭は衝撃的だ。ヒトの男女の違いはXとYの性染色体によってもたらされる。女性はX染色体を2本、男性はXとYを持つ。Y染色体は「退化の一途をたどり、やがて消失してしまう」との学説が紹介されるのだ。海外の世界的な権威の研究者が提示したものだ。「男がいなくなってしまう?」。この分野に深い関心や知識がなくても、驚きと共に読み進めることになる。「ええ、これですごく興味を持ってもらいたい。染色体についてじっくり読んでほしい」と思いました。狙いは成功した。

地球の生物およそ175

万種の中には、環境により雄と雌の比率を変える生物や性転換する生物、性のない生き物もいる。ではなぜ、ヒトには雌雄同体がないのか。性はどうやって決まるのか。性の未来は。そうした本質的な問いが投げかけられ、読者は生命の神秘に驚き、感心する。

一方で進化論を提唱したダーウィンや遺伝学を切り開いたメンデルらの興味深い逸話なども盛り込み、読者を飽きさせない。また一度に読み通せない読者のことを考え、重要な内容には「科学論文で一番嫌われる繰り返し」もあえてした。「DNAやゲノムについて書かれた本はたくさんありますが、染色体は少ない。この本を読んで、若い人たちが関心を持ってください」。入魂の一冊は、読者が生命の不思議を見つめる顕微鏡になるだろう。【栗原俊雄】